

## 教会暦と聖書の流れ

きょうの箇所は、マタイ 13 章 1 節から始まった天の国(神の国)についてのたとえ話集の結びの部分で、ここに 3 つのたとえ話があります。これら 3 つのたとえ話はマタイ福音書だけが伝えるものです。

イエスのたとえ話を読むとき、解釈の可能性はいろいろあります。メッセージの意味が確定できない一つの理由は、イエスの言葉だけが伝えられてきて福音書に載せられているので、たとえ話の語られた本来の状況がよく分からなくなっているからだと考えられます。ですから、唯一の正しい解釈は何かと考えるよりも、イメージをふくらませ、いろいろな読み方をしてみるとよいかもかもしれません。

## 福音のヒント

(1) 「畑に隠されていた宝」と「真珠」のたとえ話はよく似ています。古代では真珠は養殖されるものではなく、自然にできたものを発見するだけだったので非常に高価でした。この 2 つのたとえ話は、天の国は人間にとって最高の宝だから、何にもまして天の国を求めなければならない、と教えているという解釈が一般的でしょう。「天の国」は「神の国」と同じで、「神が王となる状態＝神の愛がすべてにおいてすべてとなる状態」と考えればよいでしょう。あるいは「本当の意味でわたしたちが神と共にいる状態」と言ってもいいかもしれません。このたとえの場合、「畑に隠された宝」「高価な真珠」が「天の国＝神の国」だということになります。わたしたちにとって本当の宝とは？ すべてを売り払ってでも手に入りたいものとは何でしょうか？

最初のたとえでは、なぜただの宝ではなく、「畑に隠された宝」なのでしょう。「見つけた人」は小作人で、たまたま主人の畑で働いているときに宝を発見したということなのでしょう。畑を買わなくとも宝だけを持ち去ればよいのかもかもしれませんが、彼は畑そのものを手に入れます。そこに何か意味があるのでしょうか。次のようなことを考えてみてもよいかもかもしれません——彼が見つけたのは自分自身のうちに隠されていた宝だったのではないかと。それを発見したときに、彼は自分の人生を手に入れたことになるのだ (もはや小作人ではなく自立した農民になる)、と。

(2) 別の解釈があるとすれば、それは「畑に隠された宝」や「真珠」をわたしたち人間のことだと受け取ることです。ちなみに、47 節以下の漁のたとえ話では、明らかに神が漁師で、人間は神が獲得する魚です。人間が神を求めるよりも、神のほうをわたしたちを探し求めている、そう考えてみるとまったく別の面が見えてきます。

このように考えた場合、「持ち物をすべて売り払って」も特別なニュアンスを持つことに



なるでしょう。神が人間を獲得するためにすべてを犠牲にした、それは「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3章16節)、「イエスはわたしたちのために命をささげてくださいました」ということを連想させないでしょうか。そう受け取るならば、これはもう、ただひたすら感謝する以外にないことです。

福音書のたとえ話は1つの教えというよりも、1つのイメージなのです。好き勝手なイメージでどんなに曲解してもよいというわけではありませんが、イエスの生き方とメッセージ全体とつながるイメージであればよいのです。また、そのイメージがわたしたちの現実とつながるイメージであれば、そこには大きな力があります。

(3) 漁のたとえは、明らかに前半(47-48節)と後半(49-50節)に分けられ、後半は前半の説明のようになっていきます。内容は、先週の毒麦のたとえ(24-30,36-43節)とよく似ています。福音記者マタイの頭の中には「救いの歴史」というものが明確にあったようです。「旧約時代の律法や預言→イエスによるその実現→教会の時代→世の終わりの裁き」。マタイ福音書では、こういう考えに基づいて、そこからイエスのたとえ話を理解しようとする傾向が強いと言えるでしょう(先週の「福音のヒント」参照)。

毒麦のたとえのように、マタイ的な解釈の部分を取り去ると、本来は「天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚(良いものも悪いものも)を集める」というだけのたとえだったのかもしれませんが。そうだとすれば神がどんな人をも招いている、というところにたとえのポイントがあることとなります。

今のわたしたちにとっての意味はどうでしょうか？ 終末の裁きというのはへたをすると人に恐怖心を植え付け、それによって人をコントロールするメッセージに聞こえてしまうかもしれません。しかし、本来の終末についてのメッセージは人に恐怖心を与えるためのメッセージではありません。神の判断で何が「良し」とされるかを明確に示し、その神の判断にかなう生き方をするように決断を迫るメッセージなのです。今はすべての人が招かれている、と同時に、その招きにふさわしく応えるかどうかが問われる(この点でもっとも明快なメッセージはマタイ25章31-46節です)。イエスの福音にはこの2つの面があります。どちらか一方だけではダメなのです。

(4) 「天の国のことを学んだ学者」とは、この文脈では弟子たちのことです。「無学で普通の人」(使徒言行録4章13節)であった弟子たちがここでは「学者」と言われるのです。マタイ23章34節によれば、マタイの時代の教会には、実際に「預言者、知者、学者」と呼ばれていた人がいたようですが、ここでは特別な教師職にある人というよりも、すべての弟子のあるべき姿が語られていると考えるべきでしょう。イエスの天の国の教えをよく理解することが弟子のあるべき姿なのです。

「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人」はもちろん、イエスご自身のことでしょう(マタイ10章25節参照)。古いものとは旧約時代に神が示されたこと、新しいものとはイエスによってもたらされた天の国の福音と考えることができます。わたしたちはこのイエスに「似ている」というのです。もしも本気で受け取ることができるのであれば、これはどれほど大きな恵みの言葉でしょうか！